

魯迅著「阿Q正伝、藤野先生」講談社文芸文庫 1998年5月10日刊を読む

藤野先生

1. 「わたしの講義を、君はノートすることができますか」と彼はたずねた。

「少しできます」

「持ってきて見せなさい」

わたしが講義のノートを差し出すと、彼は受け取ったが、二、三日すると返してくれた。そして、これからは毎週持ってきて見せるようにといった。持ち帰って開けて見たとき、わたしはあっとおどろき、同時に一種の不安と感激とを覚えた。わたしの講義ノートは始めから終わりまで、すっかり朱筆で添削してあったばかりか、たくさんの抜けている部分が書き足してあり、文法のあやまりまでいちいち訂正してあったのだった。このようなことがずっと、彼の受け持っている学科の骨髄学、血管学、神経学の講義がおわるまでつづいたのである。

P262 ~ 263

2. なぜか知らないが、わたしはいまでもときどき彼のことを思い出す。わたしがわたしの師であると思いきめている人の中で、彼はもっともわたしを感激させ、わたしを励ましてくれた一人なのである。おりにふれてわたしはいつもこう考える。彼のわたしに対する熱心な希望、<sup>う</sup>倦むことのない教えは、小にしていえば、中国のためであり、中国に新しい医学がおこることを希望してである。大にしていえば、学術のためであり、新しい医学が中国へ伝わることを希望してである。彼の人格は、わたしの眼の中と心の中において偉大である。彼の姓名は多くの人々の知るところではないかもしれないが。

3. 彼がなおしてくれた講義ノートは、わたしは三冊の厚い本に製本して、大切にしまっておいた。永久の記念にするつもりでいたのである。ところが不幸にも7年前に転居するとき、途中で本箱を一つこわして、その中の半数の本をなくしてしまった。あいにくその講義ノートもなくした中にはいっていたのである。運送屋を責めてさがさせたが、何の返事もよこさなかった。だが彼の写真だけはいまもなおわたしの北京の寓居<sup>ぐうきよ</sup>の東側の壁に、机に向かって掛けてある。夜、仕事に倦み疲れて、なまけごろがおこってくると、いつも、顔を上げて、灯火のなかに、彼の黒い、痩せた、いまにも抑揚のひどい口調で話しだしそうな顔を眺めると、わたしにはたちまち良心がおこり、勇気が加えられるのである。そこで煙草に火をつけ、ふたたび「正人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつづけるのである。

P267 ~ 268

[コメント]

中国からの留学生、魯迅に対する藤野先生の教育的愛情が伝わる作品。教育関係者、必読の「藤野先生」。

- 2009年2月25日林明夫記 -

